

専念寺通信

1月号 (NO.161) <http://sennenji.s296.xrea.com/>

あけましておめでとうございます。皆さま、おかわりなく新年を迎えられたことと思います。気候の不順や景気の変動、大震災に遭った人たちへの支援が置き去りにされること、さらには、平和を脅かすような流れ、さまざまな気がかりをかかえつつ、平成26年が始まりました。

遺恨を結ばば

法然上人の父は、現在の岡山県久米郡の役人でした。名を漆間時国（うるまのときくに）と言い、その子法然（幼名・勢至丸）が9歳のとき、夜討ちに遭い、殺されます。このとき、いまわのきわに、幼い上人に向かって次のような言葉を遺します。「遺恨を結ばば、その仇世々に尽き難かるべし」。すなわち「おまえが敵を恨んでこれを討ったら、また、むこうの子供がおまえを恨んで討つだろう。



そのようにして争いがつながつて終わることがなくなるだろう。そういうことをしてはならない。」と言

い遺したのです。この時代には「仇討ち」はむしろ正当な行ないとされていました。けれど、法然の父は独自の考えをしっかりと持ち、幼い子にそれを伝えたのです。この言葉が法然上人の生きる核になったのだと思います。法然上人は1133年生まれですから、この時からおよそ880年の時間がたっています。私たちは戦争が終わってから68年間、ほかの国の人を殺すことなく、いかなる戦争にも軍事的な参加をせずにもちこたえて来ました。暴力は、暴力の連鎖を生むだけです。みずからの死の床で幼い息子にこのような言葉を伝えた法然の父の意志を、21世紀の私たちふつうの庶民は忘れてはなりません。敵意に敵意で答えてはなりません。「報復」のために暴力をふるうのは間違いで、そのような行為に協力すべきではありません。話し合いをあきらめない（殴る前に言葉を使いましょう。霊長類の中でも頭脳は良いはずですから）、許し、受け入、熟慮、調和、忍耐、どれも誰も怪我をしません。できるはずです。今年、私たちは、「非暴力」の語を忘れずに過ごしたいものです。写真は元旦の本堂、そしてたくさんとれた専念寺のぎんなん



平成26年1月1日 大黒

